

近代日本の海外旅行：満州旅行を中心に

内田 忠賢

総括

本セッションに関して、当日の進行を時間順に、また、この報告書での構成を紹介しておこう。

まず、当日の進行。コーディネーター（内田）による趣旨説明の後、約1時間程度をかけて、メインリポーター（高）による詳細かつ実証的な研究発表があった。さらに、コメンテーター三人（永井、熊谷、川合）による報告と、それらに対して、メインリポーターから若干のリプライがあった。その後、フロアから数人により質問や意見があり、メインリポーターとの間で議論や情報交換がなされた。

次に、本報告書の構成。まず、当日の録音記録から再現した（いわゆる「テープ起こし」の）内容ではないことを、お断りしておく。現場の雰囲気や発言のニュアンスをできるだけ生かしつつも、文章として、より適切になるよう工夫したいためである。したがって、当日の発表内容に、加筆、修正を行った部分がある。最初に、コーディネーターが、自らの趣旨説明と問題提起を記した。同時に、報告者、発言者に代わって、コーディネーターが、当日のコメントや質疑も併せて、簡略に記録した。今回は、コメンテーターへの原稿依頼は、していない。各コメントは、総じて短く、役割上、断片的にならざるを得なかったため、内田がリライトした。文責は、内田にある。次いで、メインリポーターによる研究発表を、フルペーパーに近い形で掲載した。単独でも、十分読みごたえがある内容となっている。こちらは、後日、ご本人に執筆していただいた。

当日は、午前中にもかかわらず、百人近い参加者があった。関心を持ちそうな同業者への宣伝が足らなかったと直前に後悔していたが、幸い、盛会に終わった。後日、フロアで参加して下さった数人から、お手紙で本セッションの感想や関連資料をいただいた。この場を借りて、感謝したい。

最後に、このような有意義な集会を盛り立てて下さった報告者、参加者、および、本セッションの裏方スタッフの皆様へ、心よりお礼申し上げる次第である。なお、会場係として、お二人の本学大学院生、高槻幸枝さん（旅行ガイドブック研究）、岩崎雅子さん（ツーリスト・ツーリズム研究）に、お力添えいただいたことを記しておきたい。

趣旨説明：戦前の日本人の満州旅行を考える場として

内田 忠賢

現代日本の海外旅行に関する研究書や学術論文、さらには、体験記や手引き書など単行本やエッセイは、膨大な数が公刊されている。しかし、近代のそれらは、必ずしも多くないように、私は考えている。管見の限り、当時の、いわゆる日本人が、海外旅行に出掛け、異国をどのように体験し、認識したかという視点での学術研究は、少ないのではなかろうか。さらに、彼らの旅行先をヨーロッパではなく、アジア地域に限定すれば、さらに少ないような気がする。

本セッションでは、日本人の満州旅行に焦点を当てる。この研究集会では、地理学や歴史学、観光学などのジャンルに関連する「戦前の旅行史」の一コマを明らかにするというだけでなく、思想史や政治史、国際関係論、さらには、現在、復権しつつある地政学に関連する「帝国主義と植民地」、「日本人のアジア認識」など、いくつもの重要な論点を引き出すことができる。また、ポストコロニアリズム論など、最近、注目される（流行する）論点に展開させることも、できよう。同時に、当時の修学旅行に限定して考察するという点で、教育史の議論にも展開しうるのではないか。

さて、本セッションでは、このテーマに精通した中国人社会学者、高媛さんに、ご発表をお願いした。気鋭の若手女性研究者である。彼女は現在、「日本人の満州旅行」研究の分野において注目され、その最前線で活躍中である。そのオリジナルな視点や成果は、彼女が中国人であるというだけでなく、1次資料（史）料を駆使し、思想信条を押さ

えた徹底的な実証主義にあると考えられる。今回は、分析枠組、1次資(史)料の解釈など、彼女の研究から多くを学び、同時に再検討したという思いから、発表時間として1時間程度を設定した。同時に、従来のシンポジウムにありがちな、各パネラーが各自の言いたいことの断片だけを短時間で発表して、「はい、終わり」という弊を避けたいという思惑もある。

また、本セッションを、たとえば、最近のポストコロニアリズム論やカルチュラルスタディーズが陥りがちな「机上の空論」にしないため、当時の満州旅行を体験した東京女子高等師範学校(現・お茶の水女子大学、以下、女高師と略)の卒業生、永井菊枝さんをお招きし、コメントをいただくことにした。当時、彼女が書き記した作品には、時代の雰囲気にならされず、旅先のあらゆるものを沈着冷静に見聞していた様子が、うかがえる。なお、永井さんと一緒に、女高師の満州旅行に参加した卒業生の方々にも、ご無理をお願いして、フロアでお聞きいただいた。欲張りにも、本セッションを、満州旅行、満州体験を語り継ぐ場としたかったのである。付け加えれば、旧制の女高師の学生は、全国から選抜された、少数の女子エリート予備軍であった。当時、女子は、旧制高校や東京・京都の両帝大などへの入学は認められておらず、学歴上の最高峰が女高師だったのである。現在の、お茶の水女子大学の学生も、優秀な受験エリート集団に違いはないものの、トップエリート予備軍の意識を持った当時の女高師生が、実質的に日本の植民地だった「外国」を、どのように経験し、何を考えたかは、非常に興味深い。

さらに、専門家からのコメントも、いただくことにした。まず、「アジア研究の視点」から、アジア・オセアニアの第三世界研究で数多くのご業績がある熊谷圭知さんに、コメントをいただく。パプアニューギニア地域研究の第一人者である。彼は、第三世界をフィールドとするため、「帝国主義と植民地」「日本人のアジア認識」といったテーマをめぐるオピニオンリーダーでもある。次に、本セッションはツーリズムや地理思想に深く関わる内容となるので、若手女性地理学者の川合泰代さんに「地理思想史の視点」から、コメントいただくことにした。彼女は、風景や場所をめぐる、人間の経験や意味付けについて、学術論文等で、考察をおこなってきた。この二人のコメンテーターは戦後生まれ(熊谷さんは1950年代、川合さんは1970年代の生まれ)と、永井さんと異なり、当然ながら、当時の満州を体験していない。

[付記] 昭和14(1939)年に、女高師の学生たちは、当時、日本の植民地だった朝鮮半島と、「外国」ではあるものの、実質的には植民地だった満州国に修学旅行に出掛けている。詳しくは、私の拙いレポート(「東京女高師の地理巡検:1939年の満州旅行(1)(2)」『お茶の水地理』第42・43号、2001・2002年)を、ご参照いただければ幸いである。なお、この旅行の引率者、重要人物は、女高師の当時の地理学教授であり、植民地政策などに関わった日本地政学協会の常任理事、飯本信之氏である。彼は、同盟国ドイツに留学し、本場の地政学を学んでいる。飯本は、戦後、専門を政治地理研究から、開拓地研究に転じた。戦前、戦中の植民地政策でも、彼は、開拓地や移民に強い関心を持っていたので、必ずしも「転向」したわけではない。しかし、女高師の卒業生の方々の証言では、彼の講義はイデオロギー色の薄いものだったという。世界の各地域を、先入観なく分析するよう指導した。満鮮視察旅行の報告書を学生が作成する際も、当局の目を気にせず、考えたままの感想を書くようにと指示したように、人物像は、すこぶるリベラルだったそうである。

研究発表：戦前における「満洲」への修学旅行

高 媛

(本報告書1-5~11ページ参照)

*本報告書では、当日の発表に沿った論文を掲載しているため、ここでは省略する。なお、満州の用字について、高さんは、当時の歴史的な文脈を重視し、資(史)料に登場する「満洲」を用いている。一方、内田は、現在、日本で一般的に使われている略字「満州」を採用した。

[付記] 高さんは、最近出た雑誌『衍書月刊』2003年8月号(通巻215号)の特集「満洲のツーリズム」において、「満洲修学旅行の誕生」「満洲都市を彩る観光バス」という二つのエッセイ、西原和海氏との対談「観光の満洲」を発

表している。

コメント1：満州旅行参加者の視点から

永井 菊枝

昭和6年の満州事変、翌年の満州国建国、日本の国際連盟から脱退、12年に日中戦争へと拡大、時局は大戦前夜であった。同盟国ナチスドイツからは、ヒットラーの親衛隊、ヒットラーユーゲントの男子たちが、はるばる女高師を訪ねてきた。私たちは、整列して、下村校長作詞の歓迎の歌で彼らを出迎えた。

さて、今から64年前、昭和14年に女高師の学生有志による満鮮視察旅行が実施された。この旅行は、文科3年生が主として企画立案し、如蘭会（校友会）主催であった。旅行の目的は、満州国を見聞すること、特に開拓移民の実情を見聞することだった。この20日間の旅行では、古い歴史を持つ朝鮮半島、満州の風景や施設に、とりわけ関心を持った。同時に、異民族文化の共存する広大な隣国に、日本が参入することは、複雑かつ困難な問題が潜んでいると実感した。泥道をたどって、開拓村、四家房の大日向村開拓団を訪ねた時も、日本人を入植させる開拓移民政策について、考えさせられることが多かった。唯一の救いは、分村という智恵で、仲間が助け合って、この難局を乗り越えて欲しいと祈るばかりだった。

国都、新京の印象も忘れ難い。大同大街とその周辺の威容、関東軍司令部の壮麗さ、この街の表の顔は、新国家建設に邁進しているかに見えた。しかし、一步、裏通りに入ると、狭いごみごみした、満人の古い街だった。もっとも衝撃だったのは、その場末に、みすばらしい「満州帝国宮廷府」があったことだった。日滿不可分、五族協和の理想は何だったのか。一般邦人も、満人など他民族を見下している。これで良いとは思えなかった。建国の理想を実践する「満州帝国協和会」も、絵にかいた餅ではないか。帰国した後も、これらの疑問は解けないままだった。（内田記）

[付記] 以上は、当日の永井報告をもとに、内田がリライトした。永井さんは、前述の『彷徨月刊』2003年8月号（通巻215号）に「私の満洲」を執筆しており、当日のコメントと重複する部分が多いので、これも参考にした。なお、永井さんは女高師時代に、大陸視察旅行団（編）『大陸視察旅行所感集 昭和十四年』（同旅行団発行、1940年）という報告書に、乙骨（旧姓）菊枝「理想を目指して」というエッセイを寄稿しており、その中でも、満州の現状に対し、当時としては痛烈な批判を投げかけていた。

コメント2：アジア研究の視点から

熊谷 圭知

高さんの報告は、当時の資料群を駆使しながら、それらを丁寧に読みこなし、実証した優れたものだった。満州国とそこに関わる日本人を扱う場合、彼女はナイーブな立場にある。一つには、彼女が中国人であること。二つには、そのような彼女が、日本に住み、当時の中国東北部を研究すること。三つには、中国側の資料がないため、主に当時の日本側のデータで分析を進めざるを得ないことである。しかし、彼女は、それらを考慮しながら、客観的なスタンスを崩すことなく、説得力のある議論を進めている。

次に、永井さんのコメントも、優れたものだった。女高師の卒業生の優秀さを示すだけでなく、彼女の洞察力に富む資質によるものと思われる。

さて、本セッションに参加して、改めて考えたいことが三点ある。一つは、帝国を「見る」、「見せる」という二方向からの視点である。二つ目は、それらの「まなざし」の相互作用である。三番目には、National HistoryとLocal Historyという2種類を記述する際の問題である。これらは、戦前、戦中だからという訳ではなく、現在のアジア、第三世界を考える場合も、同様の注意が必要であろう。（内田記）

[付記] 熊谷圭知・西川大二郎（編）『第三世界を描く地誌』（古今書院、1999年）という編著では、熊谷報告の後半で提起された問題について、具体的なフィールドに基づいて、記述されている。参照されたい。

コメント3：地理思想史の視点から

川合 泰代

これまでの3人の発表は、私にとって刺激的なものであり、多くを学ばせていただいた。私の立場から、今回の報告に対して指摘できる点は、以下の2点である。1点目は、江戸時代以降の日本には、庶民が団体旅行を行なう文化が存在していた点であり、この文化を明治以降の国家が教育制度に利用した可能性である。日本には、地縁仲間や同業仲間など日頃のつきあいのある人々同士で講などを組み、伊勢や富士山等々へ団体旅行を行なう文化がある。この目的の一つは、旅の同行者同士が、互いの心の結びつきを強くすることにあった。2点目は、風景を議論する際に、「人は自分が属している社会が作り出すサングラスを通して景色を眺めている」という仕組みの提示である。たとえば、今回のコメンテータの永井さんが、昭和14年に眺めた満州の風景において、彼女は当時の日本側からみた満州という社会的サングラスや、旧制の女高師の修学旅行というポジションが与える社会的サングラス等々をつきせられていたはずである。そしてこれは、今の私たちがもっていないサングラスである。風景の議論において、この社会的サングラスへの言及は必要不可欠である。しかしそれと同時に、社会的サングラスを通して人が感じた風景は、その人だけのものであり、その風景は十人十色であるということも重要であろう。(内田記)

[付記] 川合さんは、人間の主観から風景を考察した論文を発表している。たとえば、山口(旧姓)泰代「聖地的山里室生の景観の構造：人を魅了する風景へのアプローチ」(『人文地理』第49巻2号、1997年)などを参照されたい。

議論

フロアの参加者からは、次のような質問があった。列挙しておきたい。

- ・植民地として完全に領有した海外への視点と、不完全な領有状態の土地への視点では、違いはあるのだろうか。日本人が永久に居座るつもりかどうかで、微妙な差異があるのではないか。
- ・現在、「日中青年の船」という交流事業があるが、当時の大陸旅行と比べてみることもできよう。いずれの修学旅行的色彩があり、類似点、相違点があろう。
- ・ツーリズムと言っても、集団の表象と、個人の個別の表象の違いがあろう。その差異や関連も興味深い。
- ・高さんが女性である点に関心を持った。同じテーマを、男性研究者が扱った場合、とりわけ中国人男性研究者が扱った場合と異なるのであろうか。高さんご自身は、この点を意識されているのだろうか。また、女高師の学生、つまり女子学生が見た満州と、男子学生が見た満州とは、異なるのだろうか。